

設立趣旨

会の設立の目的は、設立趣意書に述べられている。正式な趣意書は、1981年の発起人会に提出したものと、会の名称を正式なものに改めた1985年に公にしたものと2つある。この趣旨、すなわち会の目的は今でも全く変わっていない。

1981年3月の設立趣意書

今日、化学と生物工業の急速な成長に伴い、化学物質と合成微生物が環境、生物及び人間生活に及ぼす影響は増大の一途を辿っており、さらにそれらに関する情報と知識もまた爆発的に拡大している。しかも、人類はまだこのような歴史的状況の序章に位置しているに過ぎない。而して、人間生活に有用な新しい化学物質や微生物を効率的に探索し生産する技術、及びそれらの生産物が人類に真の恩恵をもたらすように、安全かつ効率的に利用するための技術に関する研究開発は焦眉の課題となっている。

このような研究開発は、分子から生物圏に到る各レベルにおける化学物質と生体系との相互作用に関する経験的・科学的知識を基盤として展開されなければならない。けれども、化学と生物学との、この境界領域は、伝統的な化学と生物学だけではなく、分子生物学、生化学、薬理学、毒性学、栄養学、医学、農学、環境科学等、幅広い学問分野に散在しており、統一的方法論はもとより互いの知識利用の便宜をも書いているのが現状である。

我々は上記の課題に効果的に接近する手段としては、これも今世紀後半において発達の著しい電子計算機に代表される情報技術の成果を駆使する以外にないと考える。よってここに、上記の化学と生物学の境界領域への計算機と情報学の応用に関する研究会を発足させ、広く関心のある学術同好の士間の知識の交換と研究の交流を計り、もって科学技術の社会への有効利用に貢献せんとするものである。

1985年7月の設立趣意書

今日、研究開発におけるコンピュータと情報学の役割は、ますます重要性を増している。とくに、化学と生物学の境界領域においては、大規模な理論計算によるシミュレーション、コンピュータグラフィックス、パターン認識、知識ベースシステム（人工知能）、計画技法など、高次のコンピュータ技法を駆使した「総合的研究開発支援システム」への関心が高まっている。このような新しい手法は、ドラッグ・デザイン、蛋白質工学、新素材開発などの開発研究だけでなく、生命科学すなわち分子生物学、生化学、薬理学、医学、農学、環境科学などの基礎研究においても、威力を発揮しつつある。

さらに、分子生物学による遺伝情報の解明や脳研究が進むにつれ、コンピュータの理論的基盤である情報学と生命科学との交流からは生命情報学とも呼ぶべき、新しい科学が生まれてくることが予想される。また、エレクトロニクス、バイオ素子、バイオコンピュータなど、超先端技術の研究開発においても、研究開発支援システムの重要性が指摘されている。

我々は、この分野の研究の重要性に着目し、4年前より設立準備事務局の名の下に研究会活動を続けてきた。幸い、幅広い学術同好の士の協力を得ることができ、その活動の環は広がりつつある。よってここに名称を改め正式に会として発足する次第である。